

振り子の不安

— *The Golden Bowl*における気まずさの正体 —

阿部公彦

序

The Golden Bowl (以下 *G.B.*、と略記。)に充満する気まずさは一体何なのだろう。人物たちの様にこわばった影のある表情は、何を意味するのだろうか。Jamesの小説にいつも付き纏う evilの要素がここでも関わっていることは疑いない。或る極めて情緒的な evil、Poeや Hawthorneのそれのようにいたずらに宗教性や超自然性へと飛びつくことのない、あくまで日常的で人間的な領域にとどまろうとするそんな evilがこの気まずさの大きな一因となっていることは否定できない。

我々が注目すべきなのは、この evilが Charlotteや Prince といった特定の人物だけでなく、Maggieや Adamや Mrs. Assingham などあらゆる主要人物を巻き込み、通奏低音としての気まずさを生み出して、曖昧でとらえ所のない重苦しさを人々の間に散布するというのである。この優れて情緒的な闇は、情緒的であるが故に、もはや evilと goodというピュウリタンのな枠組みで捕らえられないまま誰彼の区別なく人物の間に蔓延する。*The Wings of the Dove*や *The Ambassadors*で曲りなりにも通用した、だます側、だまされる側、という区別を安易に採用することはできない。気まずさの根源は、一方的に特定の人物に押し付けられるのではなく、主要人物たちによって形成された関係の網の目の中で、暗黙のうちに共有される。それは、evilと呼ぶことすらはばかれるような不定形で名指し難い集団的な不安の影である。

気まずさの正体は一体何なのか、なぜこうした気まずさが小説を覆うに至るのか、といった問題を見極めるためには、より根底的な心理として人々の深層に巣くう不安について、何らかの説明を加えておく必要がある。気まずさは、この不安の解消の過程で生ずる二次的な産物に過ぎない。

不安への注目を通して、我々は、小説全体にネットワークを張りめぐらせる、或る基底的な力動性を見出すだろう。それは、定点から定点へ、という移動運動のモデルとして提示される。*G.B.*では、非人称的な移動への衝動が物語全体を覆い、旅行、結婚、贈物の授受、財産管理、知識の争奪、とあらゆるレベルの事象を通して世界が移動によって構成される様子が描出されている。これらの移動は往復性をはらみ、やってくるという感覚と去っていくという感覚との間の弁証法的な緊張によって様々な物語的機能を果たす。見逃してはならないのは、このような慢性的な往復運動への衝動が、James特有の閉じた空間の中で、極めて精密な対称性を構成し、そのために、往と復との間に鋭い反転の可能性が生じるということである。あらゆる相互的な関係性において、主体と客体の間に絶えざる入れ代わりの可能性がある。被害者と加害者の立場は、いつ逆転しないとも限らない。この意味の逆転の可能性は、「迫り来る危機」という未来の隠喩を通して認識されるため、可能性としての反転をめぐって、小説中には、静かな不安が染み渡る。

不安の原因がこのような往復移動運動の原理の中に確認されると、その不安がどのようにして気まずさの生成と結び付くのかというそのメカニズムの解明も容易になる。気まずさが、不安を解消しようとする過程で生じる副産物である以上、不安の根源である、往復運動における反転の可能性の隠蔽こそが、気まずさの発生と大きく関わることはよく納得できる。しかし、*G.B.*のただならぬ気まずさは、そのような単なる隠蔽によって生じているわけではない。我々が最終的にそこに見出すのは、生け贄としての象徴的な隠蔽を隠れ蓑にした二重の隠蔽なのである。生け贄となる隠蔽は、一方で隠蔽されつつ、他方では、生け贄であるがゆえに暴露もされる。このような語りつつ語らないという中途半端な隠蔽こそが *G.B.*の気まずさの由来であるとい

うことが確認されねばならない。

* * *

安定した「形」の回復による不安の解消こそがG.B.の中の最大の出来事であると見なす点において、本論はHollandに収斂する形ですでにまとめ上げられている、'arrangement'の修復による表層的な形式への回帰、というG.B.像を踏襲する。¹¹しかし、その後の多くの批評が、Allenにしても、Seltzerにしても、Freedmanにしても、結局、Hollandによって正確な形で提出された小説の基本構造に、上から寓意的な意味を塗り付けることに終始しているという現状にあって、本論はそのようなアプローチを極力避け、あくまで気まずさや不安といった叙情性の分析に主眼を置きたい。¹²もちろん、叙情性の本格的な理解のためには、ある程度の、テーマ論的な、基底となる形式の採集や分析も欠かせなくなってくる。そして、そのような構造分析の過程を通してこそ、今言及した往復運動の問題が浮上し、本論の大きな目玉の一つでもある、過去と未来の逆転の不安といった話題にも議論が及ぶことになるのだが、本論の眼目がG.B.の構造を寓意的に名指すことにはなく、あくまで構造の狭間から漏れ出す臭気を嗅ぎ分けることにあるということは、明記しておく必要がある。

第1章 語り得ぬ「何か」と気まずさ

1) 口を滑らせる Amerigo

気まずさの考察を始めるに際して確認しておかなければいけないのは、それが独特の心理、つまり、ある「何か」をどうしてもはっきりと口に出していえないもどかしさに結びついている、ということである。なぜ、それは名指されてはいけないのか。それが言葉による理解を拒むからか。それとも、舞台となるピクトリア朝の道徳のタブーに触れるからか。おぞましい対象から目を背けるようにして人々は、それを排除するのか。ひょっとしたらそもそも隠すべき対象などないのかも知れない、曰く言い難いものなど語られぬが故の幻にすぎない、という見方も当然有り得よう。しかし、対象そのものについて云々する前に、我々は人物たちの態度に注目せねばならない。忘れてはいけないのは、人々がその「何か」の存在を確かに意識し、また、他人が意識しているらしいことをも意識するとい

うことである。言葉による明示的なコミュニケーションを通して対象の共同化が成されないにも拘らず、人々は、その対象の存在を他者と共に、絶えず他者の視線を介して触知する。このいかにもJames的な対象の暗黙の共同化と、同時に働く、口に出してはいけないという強い集団の抑圧とが重苦しい気分を用意する。極めて深い関心と、極めて強い抑圧との融合の生み出すこのもどかしさがいつも舌足らずでたどたどしい会話の緊張感の源となる。

'... I might for the time, 'she went on, 'go to stay there with Charlotte; or, better still, she might come to Portland Place.'

'Oho!' said the Prince with cheerful vagueness.

'I should feel, you see,' she continued, 'that the two of us were showing the same sort of kindness.'

Amerigo thought. 'The two of us? Charlotte and I?'

Maggie again took a moment. 'You and I, darling.'

'I see, I see' - he promptly understood. (II, p.63)¹³

主要人物の中にあっては最もスキのある Amerigo が 'The two of us' と言われて思わず 'Charlotte and I?' と言ってしまうのは、まさに彼にとってそれが関心の中心になっているということの証しである。その一方で、不安気度、測るような疑問調には、明らかに禁忌を意識していることもうかがわれる。Amerigo と Charlotte という組み合わせの裏には、決して語られてはいけないことが潜んでいるのである。だから、正確な禁忌の遵守を力強く唱道しようとするかのような Maggie の 'You and I, darling.' という言葉に彼は、慌てて飛びつく。禁じられたものに近づいていこうとする衝動と、禁忌に触れてはならないという抑圧との均衡が崩れて、あまりに禁忌に近づきすぎてしまったその危機から、あやうく逃げ出すわけである。

'And what reason shall I give - give I mean your father?'

'For asking him to go off? Why the very simplest - if you conscientiously can. The desire,' said Maggie, 'to be agreeable to him. Just that only.'

Something in this reply made her husband again reflect. "'Conscientiously'?" Why shouldn't I conscientiously? It wouldn't, by your own contention,' he developed, 'represent any surprise for him. I must strike him sufficiently as, at the worst, the last person in the world to wish to do anything to

hurt him.'

(II, pp.63-4)

Maggieの'conscientiously'という言葉にAmerigoがひっかかるのも、それが語られてはいけないものに触れる危険性を持っているからだ、彼は逆に、その釘を指すような「誠実にね」という言葉に'Why shouldn't I conscientiously?'と挑戦的にこだわってみせることで、彼なりの朴訥なやり方で禁忌を守ろうとする心構えを示している。もちろんこの時点では、Amerigoは、Maggieがどこまで事の真相を知っているかについて半信半疑なので、禁忌の存在をMaggieに対してあからさまに認めるところまでは踏み切れない。彼には、もしMaggieが知らないなら、自分も知らぬ振りを決め込んでやろうという魂胆がある。小説の後半部で次第に顕著になる、お互いに相手を知っていることを承知の上で、協力して事の隠蔽を謀る、という状況には達していない。だから、お互いに相手の視線を共有して初めて生ずる気まずさは、まだ醸成され切っておらず、その前段階としての、腹の探り合いによる緊張が勝っている。語られ得ぬ「何か」に対する集団的な関心と集団的な抑圧との拮抗の生み出すG.B.特有の重苦しさは、この時点では、まだ、相手を知っているのかどうかをめぐる個人レベルのサスペンスと混じり合っているのである。

2) 'The Beast in the Jungle' における 「予感」の意味

はっきりと口に出されない「何か」をめぐって人物たちがぎこちない会話を続けながら腹の探り合いをする場面は、Jamesの得意とするものである。他の作品から例を引いて、G.B.のそれと比べてみよう。'The Beast in the Jungle'において、May Bartramは、半ば期待をこめながら、John Marcherの、何かが起こりそうだという予感の意味を懸命に見極めようとする。

'... I think of it simply as *the thing*. *The thing* will of itself appear natural.'

'Then how will it appear strange?'

Marcher bethought himself. 'It won't - to me.'

'To whom then?'

'Well,' he replied, smiling at last, 'say to you.'

'Oh then, I'm to be present?'

'Why, you *are* present - since you know.'

'I see.' She turned it over. 'But I mean at the

catastrophe.'

At this, for a minute, their lightness gave way to their gravity; it was as if the long look they exchanged held them together. 'It will only depend on yourself - if you'll watch with me.'

(pp.73-4)

(イタリックは、原著者による。以下、引用中のイタリックは、すべて原著者。)

Marcherの雲を掴むような言い回しの所々に楔を打ち込むようにして、Mayは、彼のいう'the thing'の意味を確定しようとする。それが'love'であること、そしてその'love'が彼女自身に向けられるものであることが'say to you'とか'if you'll watch with me'といった言葉にうかがわれるようでもある。しかし、相手の自発性を前提とする恋愛の問題であるがゆえに、彼女は、はっきりとそれを彼に確認することができない。遠回しに、「何か」に直に触れてしまわないように、ただ問いを繰り返して、核心の回りを巡回するだけである。

'Are you afraid?' she asked.

'Don't leave me *now*,' he went on.

'Are you afraid?' she repeated.

'Do you think me simply out of my mind?' he pursued instead of answering. 'Do I merely strike you as a harmless lunatic?'

(p.74)

Mayが'the thing'の正体を見極めようと躍起になっているのに対して、Johnは、むしろ相手が本気にしてくれているのかを心配する。彼の関心は、Mayが自分の予感を現実的なものと考えて一緒に見守ってくれるかどうかにある。

'You mean you feel how my obsession - poor old thing! - may correspond to some possible reality?'

'To some possible reality.'

'Then you *will* watch with me?'

She hesitated, then for the third time put her question.

'Are you afraid?'

(p.74)

会話にこの様なズレが生じて、何時までも二人の間答が噛み合わないのは、すべて「何か」が明確に名指されないためである。語られ得ない「何か」のためにこそ、言葉のやり取りがぎこちなくなっている。しかし、注目すべきなのは、Mayにとっての「何か」とJohnに

とっての「何か」の間に決定的な溝があるということである。同じように 'the thing' に関心を抱いているといっても、二人がそれを共有しているとはとても言えない。二人は、一見、同じ問題について話し合っているようでありながら、実は、別々の「何か」を目指して勝手な探求を続けている。それがこの会話の軋みの本当の原因である。

Amerigo と Maggie の間の、奥歯にももの挟まったような会話がこのような会話と比べると遥かに重苦しいのは、まだ、二人の間で「何か」の秘密が共有されていないにもかかわらず、明らかに二人の関心が同じ方向に向いているからである。同じように語られ得ぬ「何か」を巡ってぎこちない俊巡を繰り返すとはいえ、G.B. の二人は、いずれ同一の秘密の前で鉢合わせして、得も言われぬぬまざるを味わうにちがいないことを予感させる。目に見えない求心力が物語を中心へ、中心へ、と絞り上げていく。彼等の姿勢の中には、早くもその「何か」を隠蔽しようとする傾向があるが、一致協力したこの隠蔽への意志がかえってこの中心に向けての息苦しいような求心性に拍車をかける。何とか「何か」を明るみに引き出そうという中心への意志の働く 'The Beast in the Jungle' では、むしろ話せば話すほど二人がばらばらの方向にそれていくのに対し、始めから求心力の働いている G.B. では、その「何か」を隠蔽しようとするにもかかわらず、蟻地獄のような中心の魔力から逃れられないという状況が生じている。

3) 使者 Strether を問い詰める Chad

今度は、*The Ambassadors* を参照してみよう。物語が最大の転換点に差し掛かる場面である。Chad を連れ戻すべく派遣された Strether が、パリで体験した「何か」に魅せられて、アメリカを、そして、Chad の母親、Mrs. Newsome を裏切ろうとしている。

Chad, as if it still puzzled him, waited a minute. 'You don't want to get back to Mother?'

'Not just yet. I'm not ready.'

'You feel,' Chad asked in a tone of his own, 'the charm of life over here?'

'Immensely.' Strether faced it. 'You've helped me so to feel it that that surely need't surprise you.'

'No, it doesn't surprise me, and I'm delighted. But what, my dear man,' Chad went on with conscious queerness, '

does it all lead to for you?'

The change of position and of relation, for each, was so oddly betrayed in the question that Chad laughed out as soon as he had uttered it - which made Strether also laugh.

(II, p.34)

追い詰める側だったはずの Strether が逆に Chad に問い詰められている、という劇的な 'change of position' が問答関係の逆転を通して描き出されている。今や問い詰めるのは、Strether ではなく Chad である。

'... and I'm having now, if you want to know,' Strether continued, 'enough to last me for the rest of my days.'

Chad looked amused and interested, yet still somewhat in the dark; partly perhaps because Strether's estimate of fun had required of him from the first a good deal of elucidation. 'It wouldn't do if I left you - ?'

'Left me?' Strether remained blank.

'Only for a month or two - time to go and come. Madame de Vionnet,' Chad smiled, 'would look after you in the interval.'

'To go back by yourself, I remaining here?' Again for an instant their eyes had the question out; after which Strether said: 'Grotesque!'

'But I want to see Mother,' Chad presently returned.

(II, p.35)

'The Beast in the Jungle' の Marcher と似て、Strether は、屈託のない鈍感さを見せる。彼が問い詰める側のときは、一枚上手の Chad にいとも簡単にかわされるので、「何か」を巡る駆け引きにはどこか喜劇的な調子が付きまとう。しかし、立場が変わって Chad が問い詰める側に立ってみると、俄かに言葉の一つ一つが重みを帯びてくる。しかも、事を一層複雑にするのは、Strether に自分の「何か」を隠そうとする意志のないことである。彼自身「何か」が何なのか分かっていない。そして、Strether 本人の知らない「何か」を目指して Chad は、深く深く切り込んでいく。だから、図らずもその「何か」を 'grotesque' と形容してしまうのは、皮肉にも、Strether 自身だというような事態が生じてしまう。その一方、Strether と余りにも価値観のずれてしまっている Chad は、Strether が 'grotesque' と形容した事態のグロテスクさをむしろ感じ取れない。こうして Strether の「何か」を追及して明るみに引き出した Chad がその真相の持つ意味を

本当に感得できず、反対に自分自身についての真相を知らず知らずのうちに言わされてしまった Strether が一倫理的、もしくは、審美的に真相を感得するに足るだけの感受性を持ち合わせつつも—その「何か」が自分自身のものであることが見抜けない、というねじれた状況が生ずる。Chad は、審美的にその「何か」について判断することができず、Strether は、理知的にその「何か」の所在を認識することができない。このような双方の部分的な無理解が「何か」を「何か」のまま吊りにし、何時までも会話の中に表沙汰にされ切らない、見えない部分を残して、微妙なズレを表現する。

我々がこれから観察していく、G.B. の人物たちの間に生ずる大人びた気まずさと比較すれば、いかにこれらの人物たちの、真相に対するアプローチが若気に駆られた野放図なものであるかがわかるだろう。Strether にせよ、Chad にせよ、ただただ闇雲に真相に達しようという心意気が溢れている。「何か」をめぐるもどかしさは、対話する二人が協力しきれない結果仕方無く生ずるだけであり、G.B. のように半ば納得ずくで「何か」を隠蔽しようとするためではない。

4) 禁忌を守る Maggie と Fanny

Maggie が Fanny に、Charlotte と Amerigo の密通などあり得ないと宣言してもらった場面では、「何か」について知りつつも語り得ないという状況が、かなり明示的に表現されている。「何か」を目前にしつつも、どうしてもそれに手を触れることができないもどかしさが、双方の誤解によってではなく、お互いに承知の上での隠蔽によって生じている。タガをはめられた、ある種不自然な会話に生まれる甘美な倒錯を見逃してはならない。

‘... That’s an idea it’s impossible for me for a moment to entertain.’

‘Ah there you are then! It’s exactly what I wanted from you.’

‘You’re welcome to it!’ Mrs. Assingham breathed.

‘You never *have* entertained it?’ Maggie pursued.

‘Never for an instant,’ said Fanny with her head very high.

Maggie took it again, yet again as wanting more. ‘Pardon me being so horrid. But by all you hold sacred?’

Mrs. Assingham faced her. ‘Ah my dear, upon my

positive word as an honest woman.’

‘Thank you then,’ said the Princess. (II, pp.119–20)

それまでの部分を読めばわかるように、Maggie にとって、Charlotte と Amerigo の密通は、ほぼ疑いのないものとなっている。Maggie は、そういう事実を受け入れられないほど脆弱な女性でもなければ、不必要に猜疑心をつのらす別の意味での神経の細い女性でもない。彼女は、自分に与えられた手掛かりを参考にして、全く適切な想像力を働かせながら、全く妥当な範囲で事の次第を跡づける。しかし、わかりうることをすべて正確に把握しながら、どうしても Maggie は、「何か」を事実として認定することができない。その本当の原因は、集団的な禁忌の及ぼす強い抑圧の力にある。だからこそ James 的なドキッとするような転換をへて、今度は、Fanny が Maggie に禁忌の遵守の誓約をさせる場面が続くことになる。

So they remained a little; after which, ‘But do you believe it, love?’ Fanny enquired.

‘I believe you.’

‘Well, as I’ve faith in *them* it comes to the same thing.’

Maggie, at this last, appeared for a moment to think again; but she embraced the proposition. ‘The same thing.’ (p.120)

‘I believe you’ という言葉の中に、真相について知りながら、それを真相として口にするのを禁じられた Maggie の、精一杯の抵抗が見て取れよう。彼女は、夫を、Charlotte を信じるのではなく、あくまで Fanny を信じるのである。一方、Fanny は、自ら監督役を務めて、すでに口の端にのぼりつつある「何か」の真相が、事実として語られてしまうことを禁ずる。そうすることで「何か」を語り得ぬものという地位にとどめておこうとするのである。続く部分での残酷なまでの Fanny の執拗さは、Maggie の中には見える、語ってしまいたいという衝動に厳しく封印をする。

‘Then you’re no longer unhappy?’ her guest urged, coming more gaily toward her.

‘I doubtless shan’t be a great while.’

But it was now Mrs. Assingham’s turn to want more.

‘I’ve convinced you it’s impossible?’

She had held out her arms, and Maggie, after a moment meeting her, threw herself into them with a sound that had its

oddy as a sign of relief. 'Impossible, impossible,' she emphatically, more than emphatically, replied; yet the next minute she had burst into tears over the impossibility, and a few seconds later, pressing, clinging, sobbing, had even caused them to flow, audibly, sympathetically and perversely, from her friend. (同。)

この場面が通俗的なメロドラマの「励まし」の場面を遙かに超越して、激しい硬質な美しさを放つのは、真相を知りながらそれを口にするのを許されないという強い圧迫感が物語を引き締めるからである。真相へ、中心へ、という求心力とそれを隠蔽しようとする禁忌の力との間の激しいせめぎあいから生まれる緊張感が、下手をするとだらしない感傷に陥りそうなこの場面に鈍く深い輝きを与える。

Fanny の執拗さがかえって姦通の事実を認めることにつながるということも、確かに、否定できない。不自然なまでに繰り返される、「本当に信じてくれるわね。」という問い掛けは、何よりも Fanny 自身が、自分が嘘をついていること、自分の言葉があまりに力ない見せ掛けにすぎないことを良く知っているということを意味する。しかし、同時に、それを絶対口に出してはいけないという命令の恐ろしいほどの迫力が、Fanny の畳み掛けるような詰問を通して Maggie にも伝わり、強い束縛を及ぼして、「何か」を語り得ぬ「何か」のままにしておく働きをする。

真相へ、という求心力と、隠蔽せよ、という反発力との間のこのような激しい拮抗が、最も張り詰めた緊張の中に描かれるのは、Fanny が bowl を砕く場面である。

'Well, then if it's because of this - !' And Fanny Assingham, who had been casting about her and whose inspiration decidedly had come, raised the cup in her two hands, raised it positively above her head and from under it solemnly smiled at the Princess as a signal of intention. So for an instant, full of her thought and of her act, she held the precious vessel, and then with due note taken of the margin of the polished floor, bare fine and hard in the embrasure of her window, dashed it boldly to the ground, where she had the thrill of seeing it lie shattered with the violence of the crash. . . . After which, 'Whatever you meant by it - and I don't want to know now - has ceased to exist,' Mrs. Assingham said. (II, p.178-9)

'a signal of intention' としての笑みや、'and I don't want to know now' といった言葉からうかがわれるように、明らかに Fanny には、嘘とわかっていることを強引に押し付けようという姿勢が見られる。「何か」の真相についての動かぬ証拠である bowl を床に叩き付けて砕くという行為は、Fanny 自身が姦通の事実を認めたことの動かぬ証拠でもある。しかし、その行為の激しさは、逆説的にも、そのままそのエネルギーを強い抑圧の力へと転換し、より一層の禁忌の力を Maggie の上に及ぼすことになる。Fanny は、bowl を割るという body language を通して、あらためて「何か」が語り得ぬものであること、語られてはならないものであることを Maggie に示したのである。そして、遅れて登場する Prince の 'And what in the world, my dear, did you mean by it?' (p.179) という言葉は、Fanny が勝ち誇ったように告げる通り、完璧に禁忌をマスターした Maggie によって余裕をもって迎え撃たれる。

. . . and meanwhile, as to what Maggie had meant - she said, in her turn, from the door - why Maggie herself was doubtless by this time ready to tell him. (p.180)

続く場面で、いよいよ Maggie は Amerigo に、自分が bowl を通して二人の姦通を知るに至ったことを仄めかす。

Its having come apart makes an unfortunate difference for its beauty, its artistic value, but none for anything else. Its other value is just the same - I mean that of its having given me so much of the truth about you. (pp.188-9)

事実上、という言い回しを使うなら、事実上、ここで Maggie は、禁じられた「何か」の真相の領域に足を踏み入れた。しかし、G.B.においては、実は、事実の問題ではない。問題になるのは、人物たちがいかなるやり方でその事実を受容するか、という点にある。彼等が事実に対してどのような色付けをするかが問題なのである。Maggie は、「もう、ちゃんとお見通しだからね。」と凄むわりに、始めからその 'truth' を隠蔽しようとしている。事実上は、もう、「何か」の真相を知り、また、知っているということを Amerigo にも知らしめておきながら、窮地に追い込まれた Amerigo に手を貸して - というより、むしろ窮地に追い込んだはずの Amerigo の手を借りて - 事実を強引にねじ曲げ、何も知らない振り

をするべく策を弄しようとしている。‘truth’を隠蔽することで、彼等が‘truth’に直面しているという事実をも隠蔽しようとしているのである。Maggieの心理描写が示唆的である。

... she seemed to see him hear her say even while her sounded words were other - ‘... Look at the possibility that since I am different there may still be something in it for you - if you’re capable of working with me to get that out. Consider of course as you must the question of what you may have to surrender on your side, what price you may have to pay, whom you may have to pay with to set this advantage free; but take in at any rate that there is something for you if you don’t too blindly spoil your chance for it.’
(p.187-8)

こうして、或る「何か」について十分知りながら、そして、それに対して極めて深い関心を抱きながら、知らない振りをし、その存在について口をつぐまねばならないという状況が準備されていく。そのような状況の重圧感や閉塞感は、こんな心理描写一つからもありありと伝わってくる。

中心へという求心力と、中心を隠そうとする反発力とのこのような拮抗が最も鮮烈な印象を与えるのは、MaggieとCharlotteのキスの場面であろう。しかし、この取っておきの場面は、本論の結論部に取っておくこととして、とりあえず、我々の重要な課題である、禁忌の成立の構造的な理解に取り掛かることにする。これほどまでの強力な集団的抑圧が、CharlotteとAmerigoの姦通をめぐって張り巡らされねばならないのはなぜか。これはもはや性的な事柄に対するビクトリア朝上流階級特有の対応として片付けられる問題ではない。G.B.は、単なる風俗小説ではない。彼らの姦通がかくまで選別され、聖化されるのは、その裏側に或る秘密が - 同じように皆が知りつつ語ることでできない秘密が、 - 隠されているためである。語り得ぬ「何か」とは、実は、CharlotteとAmerigoの姦通にまとめ上げられるようなものではなく、物語の隅々にまで行き渡った、もっと広範な秘密の複合体なのである。次章では、このことを明らかにするために、まず、G.B.全体に浸透する往復移動運動に注目する。

第2章 往復移動運動と反転の不安

1) 密室を旅する人々

G.B.全体を見渡してみると、一つの大きな運動性が目につく。それは、定点から定点へ、という移動の動きである。最もわかり易い形で表れるのは、場所の間の移動、つまり、広い意味での旅としてであろう。物語は、Fawns、Portland Place、Eaton Squareといった主要な場所の間の移動を通して進行する。これらの場所は、Caryの言うようにそれ自体で自足的なcharacterとなるわけではなく、それぞれ或る定点として定まった位置を占め、人物たちの移動を可能にすることによって初めて、意味を持つ。⁶⁾Portland Placeに現れるCharlotteや、Eaton Squareに入り浸りのMaggieと言った図が濃厚な隠喩を発するのは、それらの場所自体が隠喩にとりつかれているためではなく、むしろ、人物と場所との取合わせによって暗示される移動が、隠喩にとりつかれているためである。CharlotteのいるPortland Placeは、Portland PlaceへのCharlotteの移動を、MaggieのいるEaton Squareは、Eaton SquareへのMaggieの移動をこそ表現する。

事件がいつもある場所への移動やある場所からの移動を契機として起きているということも見逃せない。3巻・9章でAmerigoとCharlotteがついに本格的な姦通に踏み込もうとする場面の緊張感は、移動を題材として高められる。Charlotteの誘いは、移動の暗示から始まる。

To this Charlotte’s eyes opened straight. ‘There’s not the slightest need of our stopping here to luncheon. Don’t you see,’ she asked, ‘how I’m ready?’

He had taken it in, but there was always more and more of her. ‘You mean you’ve arranged -?’ (I, p.360)

そして、どれ程Charlotteが「その気」になっているかが示されるのは、移動に関する周到な準備を通してである。

‘It’s easy to arrange. My maid goes up with my things. You’ve only to speak to your man about yours, and they can go together.’

‘You mean we can leave at once?’

She let him have it all. ‘One of the carriages, about which I spoke, will already have come back for us. If your superstitions are on our side,’ she smiled, ‘so my arrangements are, and I’ll back my supports against yours.’ (pp.360-1)

二人の交渉が核心へ近づくほど、移動それ自体への言及が念入りで緻密になる。全く機能的な役割しか果たさないはずの匿名の‘train’の回りに、出来事のはらむ劇的な意味合いが幾層にも塗りこめられていく。

He could only keep his eyes on hers. ‘And have you made out the very train -?’

‘The very one. Paddington - the 6.50 “in.” That gives us oceans; we can dine, at the usual hour, at home; and as Maggie will of course be in Eaton Square I hereby invite you.’

For a while he still but looked at her; it was a minute before he spoke. ‘Thank you very much. With pleasure.’ To which he in a moment added: ‘But the train for Gloucester?’

‘A local one - 11.22; with several stops, but doing it a good deal, I forget how much, within the hour. So that we’ve time. Only,’ she said, ‘we must employ our time.’ (p.362)

Charlotte の ‘Only we must employ our time.’ という言葉に至るまでのこのあまりに回りとどい姦通交渉の中で、移動という換喩的な装置は、それ自体濃厚な隠喩を背負わされてしまう。そして、Charlotte の ‘as Maggie will of course be in Eaton Square’ という皮肉混じりの一言に見られるように、物事は、移動という側面から意味づけられる。

Patricia Crickによる興味深い指摘にもあるように、G.B. では、重要な会話は階段で交わされることが多い。⁶⁵ James がいつも馬車の描写を念入りにする、という同じCrickによる指摘も見逃せない。⁶⁶ これらの小道具は、いずれも場所と場所の間の移動を象徴する。MaggieとAmerigoの間に恋の炎が芽生えたのは‘drive’の途中であったというFannyによる指摘(I, p.81)、姦通に気づき始めたMaggieとAmerigoとの間で最初に意味ありげな駆け引きが交わされるのが、Fawnsに向けての移動をめぐることであり、といったことなどは、いずれもこうした移動中心的世界観を支えると言えよう。そもそも物語を始めたり、終わらせたりするのも人物たちの移動である。とくに、AmerigoとMaggieの結婚に合わせてLondonに現れるCharlotteの移動や、結末部でのCharlotteとAdamのNew Yorkへの移動は意味深い。Charlotteの出現にしても、AdamとCharlotteの出発にしても、十分な間

合いを取った、劇的かつ詳細な場面を与えられている。Jamesの描写が緊張感をみなぎらせるのは、いつも、出会い、再会、別れといった移動に関わる場面においてなのである。

しかし、移動中心的世界、という言葉から、人生を旅や漂泊と見立てるようなボヘミアン的人生哲学を読み取ってはならない。大切なのは、G.B.の移動が閉じた空間の中で行われる、ということである。目的地は、一つであり、また、すでに知られている場所である。そのような移動では、いつも、出発地と目的地との間の密接な相互関係が浮き彫りにされ、「行く」だけではなく、必ず「帰る」という要素が絡んでくる。当て所ない放浪では決してない。すべての旅の原点となっているのは、果てしない往復運動なのである。あらゆる移動は、「往」か「復」のいずれかとして分類される。往復運動の一貫としての移動という観念があまりに強いので、「往」の最中には、「復」が意識され、「復」の最中には、「往」が意識される。「往」は、「復」でないものとして、「復」は、「往」でないものとして初めて意味を持つ。憑かれたように旅行ばかりしている人々の根底にあるのは、このような意識である。

2) 差し向かいの人間関係

ヨーロッパとアメリカという二つの定点の構成する密室的な世界の中で、物理的にも、心理的にも揺れ動き続けた作家としてのJamesの作品において、このような往復性が強迫観念のように物語の運動を支配するというのもっともなことに思える。興味深いのは、小説の中で、このような往復運動の原理が、形を変えて旅行以外の様々なレベルにも浸透しているということである。

我々にとって最も注目すべきなのは、G.B.の会話が必ず一対一で行われるということである。たとえ三人以上の会話があっても、そのようなものには焦点があてられない。重要なことはすべて二人の対話の中で話される。AmerigoがCharlotteと久し振りの対面をする場面や(1巻・3章)、砕けたbowlを前にMaggieがAmerigoに詰め寄ろうとする場面などで(4巻・9章)Mrs. Assinghamが事前にわざわざ退場することなどは、極めて示唆的であろう。これは、人間関係が、閉じた空間の中の往復運動としてとらえられていることの証しである。他者とのあらゆる関係性は、拡散することなく、永遠に直線的な往復運動を繰り返す。

往復運動としての人間関係という視点は、その他の様々な主題にひそむ往復性によっても支えられる。これらの主題群を分析することで、往復移動運動の原理がどのような形で表現されているかを、より具体的に明らかにしてみよう。

財産の主題は、James の他の作品においてもたびたび登場するお馴染みのものである。そこにおいて、財産は、単に隠喩的に人物描写や舞台設定を助けるだけではなく、獲得と贈与という往復関係を通して、極めて大きな物語的機能を果たす。G.B. においては、資産家 Adam Verver とその娘、Maggie は、いつも、自分たちの財産ゆえに世間に対して負い目を持ち、何らかの形でその財産を「贈与」したいと考えている。頻繁に行われる、人々を招待してのパーティは、その一つの大きな表れであるし、Adam と Charlotte との結婚もそもそもは、優れた才能を持ちながらも、財産が乏しいゆえに社交界で活躍できない Charlotte に対する、ある種の贈与という側面を持っていた。

語り手にも、このような、財産を持ってしまうことに対する気恥ずかしさが充満していることは、Verver 氏の財産成立の過程が不必要なまでにばかされ、神秘化されたりすることからもうかがわれる。The Ambassadors において、Chad の実家の関わる事業が、これも不自然なまでにヴェールに包まれていることも思い出されるかもしれない。

Adam の心理描写の中から興味深い一節を引用してみよう。

His greatest inconvenience, he would have admitted had he analysed, was in finding it so taken for granted that as he had money he had force. It pressed upon him hard and all round assuredly, this attribution of power. (I, pp.130-1)

Adam は、'money' をもっているからといって 'power' をも持っていると思われるのは、心外だと思う。ここでさり気なく、'money' の主題が 'power' の主題に置き換えられていることに注目しよう。これがさらに 'need' の主題へと置き換えられる。

Every one had need of one's power, whereas one's own need, at the best, would have seemed to be but some trick for not communicating it. (p.131)

そして、'money' → 'power' → 'need' と数珠つなぎに増殖

する主題の連関は、極めて精妙な論理をへて、再び逆方向の、'need' → 'power' → 'money' というつながりを見せ、円環の輪を閉じようとする。

The effect of a reserve so merely, so meanly defensive would in most cases, beyond question, sufficiently discredit the cause; wherefore, though it was complicating to be perpetually treated as an infinite agent, the outrage was not the greatest of which a brave man might complain. Complaint, besides, was a luxury, and he dreaded the imputation of greed. (同。)

一見マンダラのように拡散する論理には、実は、太く、しぶとい幹が横たわっている。その太い幹が、'the effect' と 'the cause' という目くらましのようなまでに数学的に対称的な言葉遣いのために霧散しようとする部分、つまり、その幹が最も細くなる部分が、この一連の論理のクライマックスでもある。このあたりの部分を簡単に言い換えてしまえば、'reserve' の 'effect' というものは、一般に考えられている 'power' の行使とは正反対の防御的な性格を持つものなので、たとえ 'reserve' の 'cause' が 'power' であっても、いったん 'reserve' という濾過装置をへて洗浄された 'power' は人目につかない、ということである。つまり、Adam には明らかに 'power' への執着があるのだが、その 'power' を、他人に 'power' を知られたくない、という方向に使うお陰で、'power' を隠しおこせるのみならず、'power' の行使も知られずに済んでいる、ということである。

引用の最後の部分で、'power'、'need'、'reserve' とたらい回しにされた主題が、ついに、'money' の主題を呼び覚ます 'greed' という言葉で結ばれるあたりは、James の手綱さばきが最高度の冴えを見せるところであるが、問題は、要するにすべての問題が 'money' の主題、財産の主題に帰着するということである。'power' を隠そうとする Adam の心配りも、結局は、'money' に対する後ろめたさに由来している。語り手の迂回的な文体から間接的に感じ取れるのは、財産の問題と距離を持つとしてつつも、不即不離の関係を続けざるを得ない Adam の、歯切れの悪い弁解めいた引っ込み思案ぶりである。

Adam の、自らの財産に対する問題意識は何からくるのか。彼に財産を持っているという明確な所有意識があることは、今の心理描写からもわかるだろう。しかし、この所有意識には、生まれつき財産に恵まれているような屈託のない金持ちにはない、獲得意識がある。

彼の財産は、あくまで彼が自分の力で勝ち取ったものなのである。このような獲得された財産の持ち主には、財産は、流動的な所有物にすぎないという危機感と同時に、自分が財産を獲得してしまったという行為の貪欲さに対する罪の意識がある。彼の財産に対する過敏さは、やってくるものでもあり、去っていくものでもある財産のその往復的な運動性に向けられる。彼が、いつも彼の意識からはなれてくれない財産の主題に目を向けるときには、財産は、いつも獲得か、損失か、という側面から光をあてられている。

ところで、とくに大きな商売上の危険を冒すわけでもない彼には、差し当たって財産を失う可能性はない。その一方で、彼の獲得した莫大な財産は、獲得という事実を嫌というほど彼に突き付けながら、彼の手元に居すわっている。財産の往復性に鋭敏な感受性を発揮する人物として描かれている Adam は、小説の中では、(あくまで小説の中の話しだが)本来、「獲得」と共に財産の往復運動を構成するはずの「損失」が欠如するのを補うかのように、自発的な「損失」としての「贈与」への衝動を持ち続ける。財産の獲得という事実の見せつける忌まわしさに抵抗して、財産の贈与という図を導き込み、自らの行為をその図に当てはめようとするのである。このような莫大な財産に対する後ろめたさと、それに発する贈与への衝動は、*The Wings of the Dove* の Milly や *The Portrait of a Lady* の Baron を始めとする James の典型的な人物像の中にも見られるものであるということは、参考にならう。

ところで、そのような贈与の動きと表裏を成す形で、略奪の動きもあることを忘れてはならない。*The Wings of the Dove* には、Densher や Kate が、*The Portrait of a Lady* には、Madame Merle や Osmond が、そして、*G.B.* には、Charlotte と Amerigo がいる。いずれの場合も贈与が無償で慈善的なものに近づくのに反比例するかのよう、略奪は、紛う方なき略奪に近づく。Ward の指摘にもあるように、*G.B.* には、Verver 氏の財産獲得をめぐる権力闘争という側面が抜き難くあるのである。⁷⁾

このような略奪と贈与の弁証法をはらんだ移動の動きは、bowl の移動をめぐる最も象徴的な意味合いを帯びる。bowl は、始めは、Charlotte から Amerigo へ、それから、Maggie から Adam へと移動しようとする。この移動に、微妙に商人から Charlotte へ、あるいは、商人から Maggie へという移動も関わってくる。しかし、いずれの場合も、移動は、実現しない。bowl を移動させようという人々の思惑が宙に浮いた形で、いつも bowl

の移動は、劇的に中断され、ついには、本当の移動を果たし得ないまま、bowl そのものが Mrs. Assingham によって粉碎されてしまう。

実現されない bowl の移動とは裏腹に、計画されるや否やいともたやすく実行に移されてしまうのが結婚の移動である。Maggie の 'You are at any rate a part of his collection' (I, p.12) という言葉に表れているように、Amerigo と Maggie との結婚は、Verver 氏による Amerigo の血統の獲得、というニュアンスを帯びている。Verver 氏自身の再婚も獲得の要素をはらんでいる。Maggie は、父に再婚を仄めかす際に、失ったものの代わりに何かを獲得しなければならない、という言い方をする。

'... What I mean,' she went on after a moment, 'is that it strikes me I ought to at least offer you some alternative. I ought to have worked one out for you.'

'An alternative to what?'

'Well to your simply missing what you've lost - without anything being done about it.'

'But what have I lost?'

(I, p.172)

'lost'、'alternative'、'offer' といった言葉遣いから感得されるように、ここでも獲得と損失の弁証法を通して往復移動運動の原理が働いている。

3) 反転の不安

- 贈る・奪う、見る・見られる、知る・知られる

ところで、今の引用の中で Verver 氏が、あまりに単刀直入な 'lost' とか 'alternative' といった Maggie の言い回しにたじろいで見せる点は、非常に意味深い。すでに我々が確認したように、Verver 氏は、「獲得」という行為の貪欲な側面に極めて敏感に反応し、自らの行為が獲得として意味付けられることを嫌う。だから、Maggie という所有物を失った代償に新たに Charlotte を獲得し所有する、という Maggie によって準備されたシナリオを、彼は、受け入れたがらない。考えてみれば、Maggie と Amerigo の結婚を Adam による Amerigo の獲得としてとらえるのもあくまで Maggie である。'power' や 'force' が人目につくことを恐れる Adam なら決してそのような見方を承服しないだろう。とくに彼は、すでに我々も見たように、'power' や 'force' が 'greed' や 'luxury' と結び付けられることを避けたがる。二組の結婚が財力にあかせた Adam による獲得と見なされることは、まさにその

ような彼の美学に逆行するものである。

このように、登場人物が、自分の行為が獲得として読み取られてしまうことを恐れる、という状況は、G.B.に行き渡る不安と関わってくる。そもそも、G.B.の運動原理としての閉じた往復運動においては、その研ぎ澄まされた対称性のために、しばしば往と復との関係が逆転可能となる。あまりに正確な往復の振り子であるがゆえにどちらが往で、どちらが復なのかが判然としなくなる。Portland Placeに向かう Maggie は、果たして出掛けるのか、帰るのか。アメリカに向かう Charlotte と Adam の移動は、出発なのか、帰還なのか。対話関係における劇的な立場の逆転が James の得意とするアイロニーの一つであることも、言うまでもないだろう。結婚の問題においても、財産の問題においても、獲得と損失、もしくは、略奪と贈与という二つの極は、極めて正確な均衡を保っているがゆえに、かえって不安定な逆転可能性をはらむことになる。いつ、贈与だったはずのものが略奪に、あるいは、略奪だったはずのものが贈与に豹変するか分からないという不安がある。意味のアイロニカルな逆転は、しばしば G.B. 以前の James の小説でも大きな物語的機能を発揮するが、G.B. の特徴は、人々が、クライマックスで突然その逆転に直面するのではなく、絶えず意味の逆転の不安に脅かされ続けているという点にある。人々は、往と復の精密な均衡を固唾を飲んで見守る。僅かな光の加減で、僅かな視点の変化で、往と復の関係は、クルリと裏返る。

このような不安定な相互関係は、「知」の移動をめぐる闘争の中で、とくに大きな意味を持つ。「知」を奪う側なのか、それとも与える側なのかという見極めは、絶えず逆転の危険にさらされており、そこに生ずる、攻撃と防御の終りのない入れ代わり可能性が、人々の不安の大きな原因となっている。頻出する 'see through' という言葉からもわかるように、この闘争は、目の隠喩を通して表現されるが、Fanny の 'I see the boat they're in, but I'm not, thank God, in it myself' (I, p.370) というような言葉に如実に表れているように、見る者も、常に、見られる危険を意識している。知を奪っているはずが、実は、奪われている、といった事態がいつ起こらないとも限らない。

時として、Mrs. Assingham は、見るという行為につきまとうそんな不安から逃れるかのように、見る特権を放棄しようとする。'The sense of seeing was strong in her, but she clutched at the comfort of not being sure of what she saw.' (I, p.277) このような怯えに、見られることの不安が

つきまとっていることは、疑いない。そしてその見られることの不安は、別のレベルの往復運動、すなわち、略奪か贈与かという対称的な二項の反転可能性とも関わっている。

Not to know what it would represent on a longer view was a help, in turn, to not making out that her hands were embued; since if she had stood in the position of a producing cause she should surely be less vague about what she had produced. (I, p.277)

彼女が目を見ようとする 'what she had produced' とは、彼女の企画した二組の結婚の結果生じようとしている破廉恥な不倫関係のことである。彼女は、そもそも Amerigo や Charlotte の結婚の斡旋をある種の無償の奉仕と考えていた。財産家の Verver 親子と、財産がないために苦勞している Amerigo、Charlotte とを結び付けることで、自分自身、なんとなく、恵まれない貧乏人に贈与を施したようなつもりになっていた。それは、思いがけずそんな心理を夫に言い当てられたときのたじろぎにも良く表れている。

'... The thing I should never forgive her for would be her forgetting to whom it is her thanks have remained most due.'

'That is to Mrs. Assingham?'

She said nothing for a little - there were after all alternatives - 'Maggie herself of course - astonishing little Maggie.' (I, pp.279-80)

ところが、それらの結婚が破綻してみると、贈与であったはずの Mrs. Assingham の結婚斡旋が、反転して、略奪の相貌を帯びてしまう。Charlotte と Amerigo が旧知の間柄であり、結婚に際してそのことを Verver 氏に知らせていないばかりか、挙げ句の果てにその二人が姦通に走ったとなれば、たとえ Charlotte にその気がなかったにせよ、Charlotte が財産目当てに Verver 氏と結婚したという視点が成立してしまう。二人の昔の関係を知りつつそのような事の展開を許した Fanny は、Charlotte による財産の略奪に荷担したことになる。そこに Amerigo が巻き込まれている以上、Amerigo と Maggie の結婚の中心的な推進役としても、Fanny は略奪に荷担したことになる。これらの視点は、ふと Amerigo の口をついて出る「誰か、人が良くて、優しく、頭の良い、金持ちのアメリカ人とでも結婚すればいいのに」(I, p.57) という

Charlotte に対する品のない軽口にかがわれるような、財産目当ての結婚もありうるという考え方を支えにする。このような考え方は、小説の中に潜在的な視点として浮遊し、いつ誰かの行為を餌食にしてやろうかと手ぐすね引いて待っている。

結婚の破綻によって俄かに光をあてられる Mrs. Assingham の略奪は、これに止まらない。彼女の夫は、ズバリ真相をついて、Fanny が Maggie と Amerigo の結婚の推進に熱心なのは、夫のいる身で Amerigo との結婚の不可能な自分自身の欲求を、Maggie によって代理的に満足させるためだと言う。(I, p.81) 彼女がこのとき開き直って全く冷静な対応をするからといって、彼の指摘が的はずれだということにはならない。むしろ、彼女が冷静でいられるのは、夫が、Fanny と Amerigo の結婚のかなわないのを Fanny に夫がいるためだとしたために過ぎない。本当は、Fanny の Amerigo に対する欲望が満たされえないのは、Amerigo が決して自分の方から Fanny を愛することがないからである。そのことまで指摘されなかったのは、彼女にとってせめてもの救いであっただろう。

冒頭、Amerigo が、なぜ Maggie が自分と結婚しようとするのかしきりにいぶかしむ場面がある。その話題の延長線上で、Mrs. Assingham など彼の眼中に無い女性の際たる例であるということがわざわざ言及される。(I, p.22) 放っておけば当然 Amerigo の眼中にないとされるであろう中年の既婚者 Fanny がこのような形で話題にされるのは、Amerigo と Fanny の間にでも何らかの関係がありうるということを強調しておくためである。そして、(Charlotte との情事のプロセスからもわかるように) 自分の欲望の行方以外には全く想像力の働かない Amerigo が、およそ Fanny の気持ちに無頓着であることが強調されればされるほど、人知れず Amerigo を欲望する Fanny の姿が浮かび上がってくる。

もちろん、彼女は、中年女らしい分別を持って事態を良く理解している。Amerigo が自分を愛することがないということを完璧な諦めのうちに受け入れている。だから、夫の指摘に動ずることもない。Amerigo の女性との交渉はいつも 'play' に過ぎない、そういう意味で彼は生粋の 'Prince' だと夫に説明するときにも、Fanny の恨みがましきには、自分のことを決して愛しないとわかっている男に対するのに相応しい、抑制された、冷静で分析的な落ち着きがある。(pp.399-400)

しかし、愛されることを放棄した Fanny の Amerigo に対する欲望が、形を変えて、純粋な所有欲としてエネ

ルギーを蓄えているかもしれないということを見逃してはならない。少なくとも、そういう視点が存在するということが、Mr. Assingham の皮肉混じりの言葉の中に示されているのである。つまり、Fanny は、能動的に自分を欲望してくれる恋愛のパートナーとしての Amerigo を放棄する一方で、物象化された対象としての、モノとしての Amerigo を、Verver 親子をダシにして、手中に収めようとしていると見なせる。Amerigo と Maggie の結婚の破綻は、Fanny の一連の奉仕を、このようなおぞましい略奪の一貫として描き出してしまう恐れがある。贈与としての奉仕が、一転、抑圧された愛情の捌け口としての所有欲となる。

4巻・9章では、Charlotte と Amerigo の「前史」を知って茫然自失の状態にある Maggie の前で、Fanny が責任逃れに腐心し、絶望的な Maggie と、あわてふためく Fanny との間で喜劇的なコントラストが成立する。ところが、Maggie の絶望的な状態を引き立てるための喜劇的な脇役に見える Fanny は、ついに、ただならぬ決意の下に bowl を砕くに至り、俄かに深刻な役回りを得る。いつもながらの James らしい劇的な配置転換に我々は度肝を抜かれるわけだが、Fanny のこの深刻なうろたえぶりは、単なる罪悪感からではなく、自らの贈与が、反転して、略奪として読み取られてしまうことの不安からくると言えよう。彼女は、我々の確認した、潜在的な、略奪者としての彼女自身の相貌の前で、おろおろと震えている。その不安が必ずしも Fanny の喜劇的な存在感を強調するためだけのものではなく、主要人物に共有される心理的な動揺の一端であるということを忘れてはならない。

4) 不安を学習する Maggie

Maggie も、Fanny や Adam と同じように、絶えざる意味の逆転の不安に脅かされている。小説の後半では、見たいという欲望と見られることの恐怖との反転可能な往復関係が、Maggie の心理を中心にして描かれるようになる。

... but it was nevertheless quite as if she had sounded with a tap or two one of the rare porcelain plates. She had knocked in short - though she could scarce have said whether for admission or for what; she had applied her hand to a cool smooth spot and had waited to see what would happen. (II, p.4)

恐る恐る 'porcelain plate' に手を伸ばす Maggie は、自分が何を知りたいのかすら知らない。ただ、ぼんやりと、「知りたい」という匿名の衝動が頭を掠めるだけである。Freedman や Seltzer を始めとする最近の批評は、G.B. を「知」の支配権をめぐる権力抗争と見なし、従来とかく受難に合うばかりの善良な人物としてとらえられることの多かった Maggie を、そんな抗争のしぶとい勝利者としてとらえようとしている。⁹⁾しかし、こんな描写に如実に表れているおぼろ気な中途半端な知の衝動を、ひと絡げに知を求めての積極的な攻撃の姿勢ととらえてしまうのは片手落ちと言わねばなるまい。とくに、続く一節で強調される、知りたいという前進性と知られるのが恐ろしいという後退性とのアンビヴァレンスは、Maggie のみならず G.B. の登場人物の「知」の奪い合いを考えるためには、決して見落としてはならない本質的な側面である。

Something *had* happened; it was as if a sound, at her touch, after a little, had come back to her from within; a sound sufficiently suggesting that her approach had been noted.

(p.4)

「何か」に対するこの中途半端な及び腰に注目しなくてはならない。知りたいという欲望がはっきりと形をとって Maggie 本人に意識されるより先に、事態は、彼女の手を離れて一人歩きしている。'her approach had been noted' という寒々しくも不気味な事実が 'sound' によって伝えられるというこの救いようのない受動性こそが大切である。このようにして大きな事実のうねりの中に巻き込まれる主体の中に、かろうじて芽生える抵抗の意志こそが、「見てやろう」という一見攻撃的な衝動の本当の起源なのである。

いよいよ Maggie が優位に立って、疑心暗鬼に陥る Charlotte を 'cage' に閉じ込められた鳥になぞらえる描写がある。(II, pp.229-30) Charlotte には、Maggie が「何か」の真相を知っているのかどうかかわからず、どうにも為す術がない。'cage' を遠巻きにして Charlotte を観察する Maggie は、自らが 'breast of nature' に抱かれていることを実感し、Charlotte は、'a prisoner looking through bars' だと考える。Maggie は、「見る」と言う特権を得て、完全な攻勢に出ている。

しかし、このような戦闘的な場面の中にも、'Maggie, as having known delusion - rather! - understood the nature of

cages.' というような一節がある。これは、単なる同情ではない。相手への感情移入を通して明らかになるのは、見るという行為、知るという行為に付きまとう相互性である。見る自分もまた見られているかもしれない。だから、たとえ 'cage' の中にいる Charlotte ではあっても、その視線は、痛いほど Maggie に感覚される。Charlotte は、'prisoner' ではあっても、'bars' を通してこちらを見ようとしているのである。先ほど引用した 'porcelain plates' の譬えの場合と同じように、見るという積極的な行為の裏側には、見られているという根源的な受動性の意識が潜み、それがいつも逆転の可能性を蓄えて、見るものに静かな不安を与え続けている。

小説の前半では、Maggie は、まだ、このような見るという行為に付きまとう往復性の不安を知らない。彼女は、まだ、物語を支配する往復移動運動の原理を飲み込んでいない。何でも人の言うことを鵜呑みにする癖が彼女にはあるという説明が加えられていたりもする。(I, p.163) Amerigo に 'But you'll see me through' と言われても、たじろいで 'Do you mean if you give in?' というような反応をするだけである。(I, p.169) 見るという積極的な「往」の運動を知らない彼女は、見られるという受動的な「復」の運動にも無頓着である。しかし、夫の裏切りの後に彼女は、内心密かに 'I'm not such a fool as you supposed me.' と宣言をする。見ることを覚え、同時に見られることをも覚えて、見る・見られるの果てしない往復運動に取り込まれていくのである。(II, p.187)

見る・見られるの弁証法を学ぶということは、Maggie にとっては、Fanny や Adam を苦しめる贈与と略奪の濃密な往復関係にとり込まれるということをも意味する。Amerigo との結婚は、父による 'collection' の拡大にすぎないと言い放って特に悪びれることもなかった彼女の面影は、もうない。彼女もまた、贈与と略奪の間の鋭利な反転関係を認識し、それのもたらす冷たい不安に怖気をふるう。

G.B. 中のあらゆる行為は、単一の主体と単一の他者との間の相互関係の一翼と見なされる。必ず、主体から他者への働きかけであるか、他者から主体への働きかけであるか、どちらか一方として考えられる。そして、そのような関係の瞬間瞬間が、主体と他者との精密な対称性のために、何かの拍子にクルリと、いとも簡単に反転しうる。このような認識の中で、Maggie は、表面上、貧しい者に対する贈与の形をとる自分たち親子の結婚が、実は、人目につかずに父と娘が密着するための偽装にすぎないという視点を獲得。彼等の結婚は、

静かな近親相姦のための方便に過ぎない。そこに浮かび上がってくるのは、母である Charlotte からその夫を奪う Maggie と、息子である Amerigo からその妻 Maggie を奪う Adam とのおぞましい略奪者としての相貌である。Charlotte と Amerigo が良く知っているように、姦通を裏から準備したのは、父と娘の不自然な密着に他ならない。(I, p.289) Charlotte が 'what else, my dear, what in the world else can we do?' と開き直るのは、Maggie と Adam の略奪を略奪として見なす視点を、Charlotte が持ったからである。(I, p.297) Maggie は、Charlotte の目を介して、そういう視点を嫌というほど味わわされる。略奪者としての自らの像を隠微な形で、隠れた可能性として突きつけられるのである。

5) 姦通の「再来」と、G.B. の不安の形式

しかし、Maggie、Fanny、Adam といった人物たちの不安を本当に構成するのが、略奪者としての烙印そのものではなく、むしろ、見る・見られる、知る・知られる、奪う・奪われるといったあらゆる相互的な関係性に共通する、鋭い反転の可能性そのものだということを忘れてはならない。略奪者という具体的なレッテルが恐ろしいのではない。彼らの不安は、もっと抽象的で原型的なものから来る。

bowl のキズが、小道具として、そんな反転の不安を集約的に象徴しているということは、言うまでもないだろう。善意と祝福の印しであるはずの黄金の鉢は、それが実は、金ではなくクリスタルである上、キズ物でさえある、という二重の偽物性のために、かえって不吉な贈物となる。表面上の美しさと、裏に潜む禍々しさとの対称性のために、それは、まさに、人々の不安の結晶となるのである。bowl が反転の危険を内に籠らせたまま人々の手から手へと移っていく危うさに G.B. という物語の張り詰めた緊張感を読み取らなくてはならない。

そのように反転の不安を担った bowl それ自身が、Mrs. Assingham によって粉碎されてしまうということは、何を意味するのだろうか。bowl の粉碎を境に、Maggie が、ある種の決定に従った行動をとるようになるということは重要である。bowl を割ることで Fanny は、象徴的に、可能性としての表と裏の反転の危険を bowl ごと葬り去った。それと歩調を合わせるかのように Maggie は、Charlotte と Amerigo の姦通を丸ごと隠蔽するようになる。その隠蔽の本当の意義は、彼女の感得する次のような

'precious truth' に暗示されている。'the precious truth that by her helping him [=Amerigo], helping him to help himself, as it were, she should help him to help her' (II, p.187) この 'help' に単なる、感傷的な、事実からの逃避の願望を読み込んではいならない。彼女が姦通を隠蔽することで、その他のあらゆる意味の反転の可能性が葬り去られてしまう。そこには、Maggie 一人の力を越えた、集団的な抑圧の力が働いているのである。その仕組みについて詳しく考えてみる必要がある。

まず、Charlotte と Amerigo の姦通が G.B. の不安の形式を極めて明快に体现しようということに注目しよう。そもそも、二人の関係は、過ぎ去った過去の事実である。Charlotte にそれほど執着のない Amerigo は、危険を冒してまで Charlotte と交際する気はない。Charlotte も自分が半ば捨てられていることを自覚し、再びよりを戻そうとは思っていない。Fanny は、そんな二人の冷えた関係を悟っているので、二人の間柄を過去のものとして不問に付そうとしている。二人の過去を知るこの三者にとって、Charlotte と Amerigo の関係は、過ぎ去り、遠ざかっていくはずのものである。ところが、それが、新たな力を得て、再来する。彼らの情事は、かつて起こったけれどすでに失われたという過去のものではなく、今現在、そして、これから先も起こりうる、未来のものとしての可能性を持ってしまった。それは、こちらから向こうへと去っていくのではなく、向こうからこちらへとやってくる。あるいは、よしんば彼らの姦通が中止され、再び過去のものとなったとしても、二人が Verver 親子と知り合う前に交渉をもっており、それを Verver 親子に隠していたという事実と、その二人が Matcham 行を利用して姦通を謀ったという事実とは、これから暴かれるかもしれない可能性をはらんで、つまり、向こうからこちらにやってくるものとして、人々の不安を掻き立てる。

このような過去の再来の感覚は、いわゆる過去の反復とは明確に区別されねばならない。我々が、今、問題にしようとしているのは、単なる、同じ事が起きるという感覚ではない。大切なのは、去っていくはずの時間がこちらに向けてやってくるという劇的な反転の感覚なのである。振り子の往復運動になぞらえられるようなこの正確な反転は、我々がすでに確認してきた G.B. の運動原理を通して醸成されたものであるが、それが、一見単なる反復としてとらえられるような事象の中でも、強烈にその運動性をアピールすることで、G.B. という世界のあり方が改めて印象づけられることにな

る。

Maggieは、FannyやAdamの不安をも暗黙のうちに感じ取り、自らの不安と合わせて処理しようとするが、その際に、このようにして時間の問題を通して人々の不安をもっとも原理的な形で主題化するCharlotteとAmerigoの姦通を、あたかもすべての不安の根源であり、元凶であるかのように扱うことになる。彼女は、集団的な抑圧の力に動かされて、ほとんど無意識のうちに、姦通の事実の発覚をすべての不安の対象の代表に祭り上げようとする。過ぎ去った過去の、未来からの再来としての姦通の事実の暴露を、象徴的に、小説中のあらゆる不安の根源である、反転の可能性そのものの代名詞にしてしまうのである。そして、そのような視点を組み立てた上で、その姦通を隠蔽することが、その他すべての不安要素の隠蔽につながる。

6) Jamesにおける現在、過去、未来

このような中で、不安の対象としての反転の可能性が、未来に属するものとして設定されていることは興味深い。あらゆる不安は、迫り来る時間に起因する不安として感じられる。これは、未来の時間が、CharlotteとAmerigoの姦通の発覚の予感を通して、恐ろしい過去の再来を表す装置に仕立て上げられるためである。もちろん、未来そのものは、知る・知られる、奪う・奪われるといった往復運動の反転を可能性としてはらんだ、不安の根源の、あくまで、代理物である。しかし、人々は、一方で、未来の隠喩を通してのみ不安を知るようになる。未来を恐れるという姿勢がG.B.の不安の基本的な形式とすらなる。ある意味で、人々は、未来に起こりうる事実ではなく、未来そのものを恐怖するのである。G.B.の始めから終わりまでを占める長い「現在」の感覚は、長編小説の時間の遠近法を無視して、あらゆる時を棒状に伸びる「今」に包含しようとするが、それは、その向こうに、可能性としての未だ見えざる未来を蓄積し、凝縮し、研ぎ澄まし、祭り上げる作用を果たす。このようにして独特の存在感を与えられる未来が、不可視の領域に関わる心理としての不安の輪郭を描くのに大きな役割を果たすことになる。

Jamesの他の作品の中に、未来そのものが不安の象徴となるような例を見出すことも可能である。前章で引用した'The Beast in the Jungle'では、主人公 Marcherは、未来から迫り来る、語り得ぬ「何か」のために絶えず不安に駆られている。クライマックスでその'beast'が、未

来からではなく、過去からやってくるという点において、G.B.における、CharlotteとAmerigoの姦通と同じような、過去と未来の間の皮肉な反転関係を見出すことができよう。'The Jolly Corner'では、いつ現れるかと未来から主人公を脅かす幽霊が、実は、過去の自分に他ならない、というかなり奇妙な筋立てが用意されるが、これも、過去と未来の反転関係を視座に据えると理解しやすくなる。Jamesのある種の小説は、未来に対する闇雲な不安と、過去が再来する力を蓄えて待っているという予感との融合の生み出す特異な時間感覚を土台にするが、そのような過去と未来が、ともに現在の光の外にある闇として現在を脅かすという構図が、時に、それ自体、物語を生み出してしまうのである。未来と過去の反転を可能にする時間意識は、このように過去と未来の混交する「見えない時間」の総体と、「見える時間」としての現在との対峙関係を基礎にすると見えよう。本論ではこの問題に詳しく立ち入る余裕はないが、重要な問題であることは疑いない。

7) 生け贄としての隠蔽

我々は、G.B.に充満する重苦しさを、「気まずさ」という大掴みな言葉でとらえてきたが、今、その生成のプロセスについて最終的な結論づけを試みるにあたっては、もはや、魅力的ではあってもそれ自体あまりに複雑なこの言葉の表現力に頼ることをやめねばならない。我々にとって重要なのは、我々が気まずさという概念の下に把握してきたG.B.特有の重苦しさについて、それがどのような環境の下で生み落とされるのかという仕組みを正確に辿ることだけである。導きの灯火となった言葉との訣別のタイミングが大切である。

納得ずくの隠蔽が、G.B.の重苦しさの大きな一因であることは疑いない。しかし、この隠蔽を、いま確認してきたようなからくりを考慮にいれつつもう少し細かに検討すると、それが単なる隠蔽ではなく、隠蔽のための隠蔽、つまり、本当の隠蔽を果たすための、いわば、ダミーとしての隠蔽であることがわかってくる。それは、わざわざ隠蔽であることを強調されて、見せしめのようにして隠蔽される。ここに、G.B.の隠蔽の本質的な側面がある。中心へという求心力と、中心を隠さねばならないという反発力との激しい拮抗の真の原因は、CharlotteとAmerigoの姦通が、一方で隠蔽されつつ、もう一方で隠蔽されているものとして注目を浴び続けていることにある。

この見せしめとしての隠蔽が最も微妙な均衡を生み出すのは、二度に渡る Charlotte と Maggie の対決の場面においてである。5巻・2章では、'author' としての自覚を持って人々を見詰めている Maggie の所へ、異議申し立てをするかのように Charlotte がつかつかと歩み寄る。Charlotte が「恐らく姦通の事実を感じているだろう」人々の無言の視線の束にどれだけ苦しめられているかは、5巻・1章の 'a prisoner looking through bars' といった比喩や、4章の泣き出さんばかりの Charlotte を評する 'the shriek of a soul in pain' といった表現から察しがつく。そんな Charlotte が、この場面では、むしろ攻勢に出て、'Do you have any ground of complaint of me?' と Maggie に詰め寄る。

Charlotte の言い募りには全くスキがない。Maggie は、ただただ、Charlotte の描いたシナリオの通りに言葉を継ぐことしかできない。会話の流れの中で、ほぼ否応なく彼女は、'I accuse you of nothing.' と言われ、挙げ句の果てに誓いのキスマでさせられてしまう。

しかし、このような表向きの勝利がかえって Charlotte を苦しめることになるのは、疑いない。Charlotte にとって、Maggie に 'I accuse you of your intercourse with Amerigo.' とでも言われた方がどれだけ楽かわからない。もちろん、Charlotte が初めからそのような救いとしての負けを期待していたわけではないだろう。彼女のプライドは、降伏を許さない。彼女は、絶対に勝つに決まっているレトリックで Maggie に戦いを挑む。勝つためにしか彼女は、戦わない。Maggie もまた、初めから敷かれているレールの上を、Charlotte に言われるままに進み、Charlotte の指示するままに敗北する。しかし、このように小説の力学上は、ほぼ必然的な戦いの結末ではあっても、結果的に - 登場人物が意図したかどうかに関わらず - 姦通の隠蔽は、さらしものになる。姦通は、ほぼ疑いのない事実として暗示されつつ、最後に残った、言葉のほんの表層の部分によって、形だけ隠蔽される。

5巻・5章の二度目の対決では、Maggie は、積極的に責めを自分に負う。すべての原因は、自分が父と密着し過ぎたためであると認め、Charlotte に謝りさえする。このような Maggie の行為を善悪の観点から云々しても始まらない。問題は、Maggie に善意があるのか悪意があるのかという点ではなく、その行為が結果としてどのような意味を持ちうるかということにある。不器用な Maggie らしい、いかにも形式的で無骨な敗北は、かえってそのお座なりの隠蔽によって、隠される「何か」

を表に引き摺り出す。表に引き摺り出しておいて隠蔽するのである。一方で中心へという求心力を起動させておいて、もう一方で中心に蓋をするわけである。

こうして、Charlotte と Amerigo の、すでに半ば周知の密通をあえて隠蔽することで、Maggie は、あらゆる反転の危険に終止符を打つことになる。彼女は、例えば、父との不当な密着に単なる形式的な告白の中で言及することで、かえって、それを真実味のない話として偽装する。姦通の事実を、語り得ない「何か」として、象徴的に、生け贄として、目に見える形で隠蔽することで、すべてのその他の反転の危機は、隠蔽すらされずに、隠蔽されうるのである。あらゆる不安を葬り去った以上、未来は、決してこちらに向かってくることのない、安全な、永遠の未来となり、人々の生きる空間は、過去にも未来にも脅かされない永遠の現在となる。

ただ、姦通という破廉恥な行為を引き起こした張本人として見せしめにされる Charlotte の、声にならない怨念の叫びが、このような永遠の現在の外側に、いつまでも幻聴のようにこだましているということをお忘れはならない。それは、決して正当化されず、また、形を与えられることもないが、それでも、「非現在」として「現在」を脅かす過去・未来の鼓動を微かに伝え、絶えず Fanny や Adam や Maggie の抱える密かな不安を刺激する。G.B. の二重の隠蔽の重苦しさは、この押し殺したような Charlotte の叫びから逃れることはできない。

結び

本論の課題は、G.B. 中に充満する気まずさを、同じく主要な叙情として物語を彩る不安との関係性から分析することにあつた。不安が、そもそも、相互的な関係性(必ずしも人間関係とは限らないのだが)における立場の鋭利な反転の可能性の予感に起因するということが解明された。このような広範な不安の原因は、強引に、Charlotte と Amerigo の姦通の暴露の不安に押し付けられる。すべての不安の代名詞となった姦通は、象徴的な生け贄として儀式的に隠蔽される。このとき生ずる心理が G.B. の気まずさの大本なのである。その隠蔽が単なる隠蔽ではなく、より巨大な隠蔽を果たすためのダミーとしての隠蔽であるがゆえに、今にも口に出されそうでありながらろうじて隠蔽される、という極めて不自然な隠蔽が行われる。姦通は、隠されつつ表沙汰にされるのである。このような共同作業が、我々

が時に経験する、儀式特有の重たい無言を想起させるということは、指摘しておく必要があるだろう。冠婚葬祭のときに漂う、あの極めて表層的な隠蔽の生み出す妙な緊迫感は、死や結婚といった根源的な不安を隠蔽するためのダミーとしての隠蔽故のものなのかもしれない。いずれにせよ、G.B.が、最終的に、宗教祭儀的な荘厳さへ向かうという点は重要であろう。中心を隠そうという身振りとは、反対に、中心への求心力を掻き立てようとする指向性との融合は、極めて重たるい気まずさを生みつつ、独特の不安定な形式性の中で、日常と非日常との接点を表現するのである。

注

- (1) Laurence Holland: *The Expense of Vision* (Princeton U. P., 1964)
- (2) Elizabeth Allen: *A Woman's Place in the Novel of Henry James* (Macmillan P., 1984)
Mark Seltzer: *The Art of Power* (Cornell U. P., 1984)
Jonathan Freedman: *Professions of Taste* (Stanford U. P., 1990)
- (3) James の作品からの引用は、すべて *The Novels and Tales of Henry James* (Charles Scribner's Sons, 1937) からとする。なお、一作品が全集中の二巻に渡る場合は、'I'、'II' で区別する。
- (4) Elizabeth Cary: *The Novels of Henry James* (Haskell House, 1964), p.96
- (5) *The Golden Bowl* (Penguin Books, 1985) の 'Notes' (p.584) 参照。
- (6) 同、'Notes' (p.584) 参照。
- (7) J.A.Ward: *The Imagination of Disaster* (U. of Nebraska P., 1961)、p.149
- (8) Jonathan Freedman, Mark Seltzer, 前掲書参照。